



熊本県内の大学でマンガを取り巻く状況が変わったのは、2012年に県立熊本近代文学館（現くまもと文学・歴史館）で「マンガ王国熊本 マンガミュージアム展」が開催されてからのことだ。

熊本ゆかりのマンガ家、原作者、研究者が想像以上に多かったこと、原画や刊本の提供などにマンガ家が協力してくれたこともあって、展示会は大好評だった。

崇城大 専門コース開設

2014年にまとめた「くまもと×マンガ―熊本マンガミュージアム構想基礎調査―」の報告書



そんなマンガの持つポテンシャルの高さに最初に関心を示したのは崇城大。当時の文学館の館長と私で、学長以下大学当局との面談

に臨んだ。以前にもマンガ関連講座を開設しようとしたことはあったそうだが、その頃はまだ機運が盛り上がりすぎた断念。今

回は状況が一変して早速学内での検討が始まった。

カリキュラム作成や教員配置については、マンガ学科・学部を全国で最初に設置した京都精華大の協力を得ることになり、14年度から芸術学部デザイン学科にマンガ表現コースが開設されることになった。

専門学校ではなく大学でマンガを学ぶ意義はどこにあるのか。それは絵を描くスキルを身につけるだけでなく、マンガ表現の背景にある文化理解、コミュニケーションツールとしての活用など「教養としてのマ

ンガ」が学べるところだろう。そうすることで、自分で発信できるクリエイターとなることができる。

そこで私はマンガを文化として理解させるために、14年度から20年度までマンガ史とマンガ産業論の授業を担当することになった。

座学に加え、フィールドワークとして私が管理しているマンガ倉庫での刊本整理作業のサポートや、熊本ゆかりのマンガ家の出身地マップ作成プロジェクトを進めてきた。

学生たちは熊本にこれだけ多くのマンガ刊本が集ま

っていることや、マンガ家を多く輩出していることに驚いていた。これもマンガ県くまもとの土壌作りの一環だ。

この間、指導した学生の中には、卒業後に編集者、研究者、マンガ家、マンガミュージアムスタッフになった者から、デザイン、イラスト関係の仕事をしている人まで多種多様。マンガ表現のスキルを持っていれば、いろんなところで応用が利くことがわかるだろう。

◇はしもと・ひろし N



PO法人熊本マンガミュージアムプロジェクト

ト(クママン)代表、合志

マンガミュージアム館長。

発信するクリエイター養成